The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ロビン・ディアンジェロ（著） 貴堂嘉之（監修）上田勢子（翻訳）『ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか?』明石書店、2021、256項、定価2750円
Author(s)	大川, ヘナン
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 314-316
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88560
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

ロビン・ディアンジェロ（著）貴堂嘉之（監修）上田勢子（翻訳）『ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか？』

明石書店、2021、256項、定価2750円

大川 ヘナン

あなたはこれまでに誰かに対して差別をしたことがあるのだろうか。もちろん大半の者はないと答えるだろう。でもそれは本当だろうか。何かしらのマジョリティ性を有している者であれば誰でも気付かぬ内に他者を差別している可能性がある。もちろん差別はあってはならないものであり、反省すべきことであるが、もう一つ重要なことは自身の差別的な行動を認めることができるのかどうかである。あなたは自分の差別に向き合うことができるのだろうか。本書はアメリカ社会における白人を研究対象として差別に向き合うことの難しさを如実に描き出している一冊である。

2020年5月に米国ミネソタ州ミネアポリスで黒人男性のジョージ・フロイド氏が白人警官によって8分46秒もの間頸部を膝で強く押さえつけられ、「呼吸ができない、助けてくれ」と懇願したにも関わらず命を落とす事件が起きた。このいまいましい事件をきっかけに「ブラック・ライブズ・マター運動」（通称：BLM）に再び火が付き全米的なデモ・暴動へと発展をしていった。これまでも白人警官による黒人に対する暴力や差別は長らく批判されてきたが、構造化された差別は依然として米国社会に根強く蔓延していた。BLM運動には黒人のみならずアジア系やヒスパニック、または白人の若者たちも加わり反人種差別が訴えられることになるが、同時にカウンターデモとして、黒人のみならず全ての命が大切であると訴える「オール・ライブズ・マター運動」や青い制服を着ている警察官の人権も守られるべきであると訴える「ブルー・ライブズ・マター運動」も展開されることになる。BLM運動は白人や警察官の命を軽視するものではなく、構造化された差別が蔓延する米国社会において黒人の命や人権が軽視される現状に対しての抗議であったが、必ずしも全ての白人たちがそれを受け入れることはできなかった。本書で登場する「ホワイト・フラジリティ」という著者による造語は、そのような差別に向き合うことができない白人たちの脆弱性を表すために生まれた言葉である。

本書は白人の脆弱性である「ホワイト・フラジリティ」を理解することを目的とする。前半では歴史的に黒人差別・人種差別が構造化されていった過程を振り返りながら白人の特権について論じ、後半では著者が企業に対して実施しているダイバーシティ研修での白人エリート男性たちとのやりとりを実例として示しながら、白人たちが自身の特権性を直視できてい

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程；rennan428@gmail.com

ない現状を描き出している。

差別する主体としての白人に対して痛烈に訴えかける本書の反響は大きく、原著である "White Fragility: Why It's So Hard for White People to Talk About Racism" は米国版 Amazon.com において3万件を超えるレビューを受けている。レビューの中身は熱狂的に賞賛するものから、全面的に批判するものまでと多様であり、米国社会において本書がどれほどのインパクトを与えたのかを見てとることができる。一方で米国における白人に対して投げかけられた本書の強烈なメッセージを日本の読者は日本社会の文脈に置き換えて読むことが求められる。本書は米国社会に対して強力なメッセージを発するものであるが、そのメッセージは必ずしも白人のみをターゲットにしたものではない。社会における特権的なマジョリティの全員が本書の批判の対象として据えられうる。そのため、本書のメッセージを米国社会におけるムーブメントの一部として読むのではなく、日本社会における「日本人」の特権性に置き換えて読むことができるのかどうかが一つの重要なポイントとなる。著者の白人の差別への向き合い難さが「ホワイト・フラジリティ」であるならば、日本人の差別との向き合い難さは「ジャパニーズ・フラジリティ」と呼ぶことができるだろう。

日本社会は米国以上に構造化された差別が見えづらく、日本人は日本社会に蔓延する差別には無自覚である。現在鮮明に浮き上がっているものとして外国人に関する問題を挙げることができる。在日韓国・朝鮮人に対するヘイトスピーチや高校無償化から朝鮮学校のみを除外する政治的差別は明確に認識することが可能である。また外国人技能実習生を低賃金で劣悪な環境で働かせている現状を国際社会からは「現代の奴隷制度」として批判をされている。そして、外国人問題のみならず、日本人に組み込まれることで差別がより不鮮明になったのは沖縄やアイヌの人々である。沖縄やアイヌの人々は文化と言葉と土地を奪われることになったものの、それについて多くの日本人は自分たちが差別をする主体であるという自覚はないのだろう。特に沖縄に関しては民族的な文化の剥奪のみならず、米軍基地問題の大半を押しつけている現実に対して、差別構造が成立していると認識している人は多くない。そして、日本社会において部落差別問題も依然と解決されていない大きな問題の一つでもある。人種的にも同じであるにも関わらず、就職差別や結婚差別は未だに日本社会で起きているのである。このように日本

においても様々な差別問題があるにも関わらず、多くの人々は日本社会の差別構造に対して無頓着であり、無自覚である。

本書は米国社会における構造化された人種差別問題に対して白人が差別構造に向き合うことができないし、そもそも向き合う強さを持っていないという白人の現状を痛烈に批判した一冊である。しかし本書を手に取って読むことになる日本人読者も自分が試されているのだと自覚しなければならない。本書は単なる対岸の火事ではない。日本社会にも同様に、もしくはより不明瞭な形で差別構造が構築されている。読者にはその構造化された日本の差別を意識しながら本書を読むことが求められる。本書は「人種問題」「差別問題」「マイクロアグレッション」「マジョリティの特権」に関心のある方におすすめの一冊である。